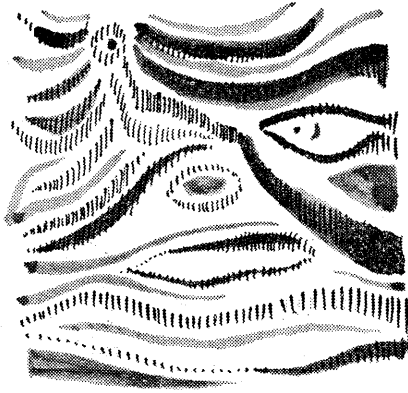


## 子どもの遊び (その5)

E・A・A・フェルメール

浜口順子訳



### (四) 遊び的造形

これから扱う遊びにおける「形式(形態)」には、伝統やルールによって成立する形式とは全く違う意味がある。それは確立されている形式というのではない。なぜなら子供が自ら喚起する形式だからである。前節で述べたような伝統的な諸形式あるいはルールなどは、核としての遊びをとり巻く周辺の領域に属するが、これとは対照的な、子供自身の「形式(形態)」で彼らは大いに遊ぶのだ。

ここで論ずる遊びの位相において、形態(形式)付与こそが遊びの本質である。形態付与はすなわちセンス、ゲシュタルトであり、そこで子供は遊びを把握する。具体的にはブロックの塔、道路を掘り抜いた砂山、あるいは遊具の美学的な組み立てや、人形用の小さな家具などをめぐって、形態付与はすすんでいく。形態付与はこの場合、子供独自の介入的行為であり、変化を及ぼす。し

かし、この介入は欲動的傾向から起こるのではないし、ましてや模倣や目標到達などをめざしているのでもない。後者については後で言及しなければならぬ。

子供自ら形態を与える時、たとえば塔を立てようという時、他の人の作った手本どおりにやろうとはしない。しかし、そこでの形態というのは、それまでに何度となく同じ様式で誰か他の人たちによって作られたことのあるような、ごく単純なものである。人形のお家にままごとの家具を気の向くままに並べたとしても、その結果としての配置は、すでに他の誰かによって同じ様に実現されたことがあるかもしれないのだ。しかし子供が関与しているのは、形を模倣させようと他者のためにあるような結果物ではない。形態自体とその形成過程に関与しているのである。そうした形態付与は、生産物の効用を目的とした労働生産のような、形態の外側にある目的のための創造活動とは異なる。たしかに形態付与の過程で、ある目的が浮上してくることはある。たとえばブロックを積み上げているうちに塔を完成させようと思立

つ場合などそうだが、これには自己獲得への意識が作用している。その際形態付与の中にある遊び的特徴は消失する。なぜならそこで作ろうとめざされている(塔)のは、形態付与および結果的形態の外側にあるものだからだ。自己獲得を意識することによって、子供が塔を作りながら、その塔自体よりも讚嘆すべき見栄えの方に気をとられてきていることがわかる。形態自体には属さない外側にある目的に専念することによって、形態付与はたやすく変容し、利潤目的の労働のようになる。目的性の変化しやすさに目を向けてみよう。

ここで「形態付与」と「遊び的造形」という新たな区別が必要になる。形態付与の過程において、驚きや期待がいつ訪れるかわからない真の遊び的対話(訳註、遊ぶ主体と対象との間の)が起こる。それは偶然的な結末を伴う遊び的即興ともいえる。これが遊び的造形であり、結果物としての形態を形成しようという目的性は見られない。この遊び的即興こそが本当の遊びである。子

供が塔を作ってもそのままではとどまらず、形をさらに変化させていく。形態付与を可能にする（自由な）変形性と共に子供は遊ぶ。この遊び的造形を、結果的形態の創造としての形態付与と区別しておきたいのである。形態付与は結果として生じる形態へと強く方向づけられているものの、遊びに特有な遊ぶ者とモノとの対話や、驚きの瞬間を導く何かをもなお保有している。期待（訳註、驚きと共に遊びを持続させる一契機である）についても同様に考えられよう。形態付与は誰よりもまず子供自身によって統轄・管理されているのである。

遊び的造形を、感覚受感的遊びと対にして理解することができ。ボールを使った遊びの循環性運動からサッカーなどのルールを伴なう遊びが生じてくるように、造形的遊びは感覚受感的遊びから派生し得る。感覚受感的遊びが素材の感覚性と共にすすむのに対して、遊び的造形は変形性をめぐって繰り広げられる。

感覚受感的遊びの際もそうだったが、遊び的造形もやはり砂浜で観察することにしよう。見る者の目にとびこ

むのは子供が砂や水をかき回したり、かき分けたりする様子だけではない。子供は形を与えようともするのである。バケツを使って「砂のケーキ」を焼くこともあるが、大抵は何の道具も使わない。砂山を作り、道路を掘り抜き、城砦を築いてその外壕には水を流し込むこともできる。遊び的造形は、形をめぐって不断になされる運動であり、計画なしで山路を掘ったりダムを築いたりするものの、形態なき結果とはならない。それは即興的に繰り広がる変形だが、たとえば子供の帰宅時間などには偶然中止するのやむを得ない。遊びに取り組む上で計画性・プランというものはなく、「何が出来るかそのうちわかる」と答えられるような態度が要請されている。

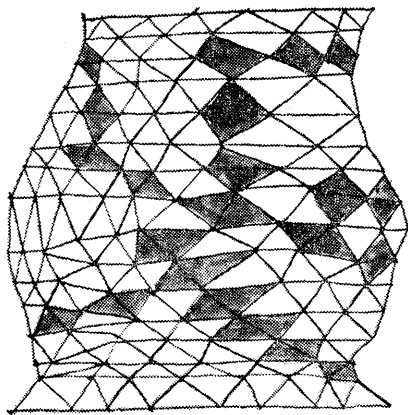
しかしこの遊び的造形は形態付与への容易に変化する。運河をめぐらしたとりでを作ろうというような目的意識が生じる場合などはその一例だろう。その子供は結果としての形態と関わっているのであり、その形態には子供自身の意図に沿って作られたもの以上の発展性は

見られない。

「常識」では、製作的な活動の方が遊びよりも高い価値があるとされている。子供もこのことには気付いている。そのために気の向くままに即興的に遊んでいる途中で、家に帰らなければならぬことを思い出すと、「まだとりでが出来ていないから完成させなくてはならない」というプランを作りあげるのである。このプランは多分その時点で思いついたばかりのものだろうし、同時に遊び時間を延長するための動機にもなっているのだろう。最後まで遊び通したいこともあれば、途中でやめてしまっかまわぬ場合もある。子供はこの違いを直観している。ところで形態付与がいかんして起こるのかという問題がまだ片付いていない。砂浜でのすてきな午後遊び時間を延長して作ったとりでは、それ以上の発展性がないのだろうか。

遊びを観察する際、目的意識の変化には常に注意していなければならない。遊びはその形態をいろいろに変化

させるだけでなく、遊びが遊びでなくなることや、その逆も起こり得る。殊に遊びの造形と形態付与とは容易に入れ替わる。形態は変化しながら、斯くあるべしという一つのプランへと向かっていく。しかしまた逆に、不意に訪れた驚きや、形態付与の過程で子供が諸印象を広く受容する開示性、あるいは固定的なプランにとらわれない子供性などによって、目前にあるプランがまた簡単に



解消されてしまうのである。

ところが時がたち子供時代を過ぎた後にも、この遊比的造形は起こる。他のことに気をとられたり人の話に耳を傾けたりしている時、自由な思いつきの中で落書き絵を描いたり、手元の何かをもて遊びつつ次第に形を変えていくなどの形態遊びをしたことのない人はいないだろう。ドイツ語では *Basteln* (組立)、あるいは *Gestalten* (形成) などという形態付与 (蘭: *vormgeven*) は、子供の創造性を目的指向的に表現したものである。もともと子供が形態模倣をしない限りにおいてであるが。遊比的造形を即興的に喚起するので、常に創造的であるといえる。子供の即興性には直観可能性が前提とされるので、これ故に形態を伴なう遊びを審美的遊びと名づけることができる。遊びと芸術との親近性がこの遊びにおいて示されているが、「審美的」という用語は「印象に形式を与える自由の活用」という意味以上に拡大解釈されるべきではない。子供は受容した印象の一般的な意味 (センス) をまだ追求しようとはしていない。遊びの中

の諸形態はまだ子供の人格的な表現にすぎないのである。<sup>①</sup>

### (五) 遊びと自由表現

形態付与と遊び的造形の両者を観察し得る領域がまだある。自由表現と呼ばれる領域だ。子供は発達するにつれて、自分の印象を豊富に把握することが可能になる。

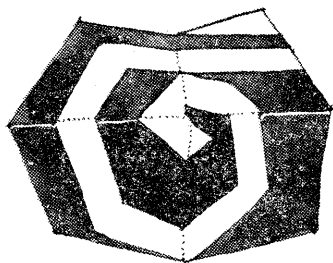
幼児期後期に形態付与が出現してくる。そのため幼稚園では描画、粘土細工、切り絵などの機会を与えて子供の創造的意欲を刺激する。鉛筆、紙、絵筆と絵の具、粘土や積み木などの材料が提供され、子供はお手本なしに自由に形態付与や遊び的造形に取り組む。自由表現やレクリエーションとしての手工芸は小学校教育課程においても必要なオアシスとして取り上げられており、学校生活の中で学習・作業面からだけでは満たされない部分を補っている。<sup>②</sup>

こうした型のレクリエーションへの関心の高まりはま

だ他でも見られる。クヴァント Kwant は『人間と表現』の中で次のように言う。<sup>③</sup>今日の表現的生活はもはや科学・技術の過剰に従属した状態にある。一方「洗練された過去の形式」からは遊離しており、芸術面においては解釈があまりに知的明解性に傾倒し、身体的存在の根源的自然性が軽視されてきている。その結果手工芸は新しい意味を持つようになった。昔はこういう仕事は社会的弱者層に託されていたが、技術革新によってその労力が解放された。「人々は今や手を使って働こうとしている。楽しいから容易なことなのだ。」こうして可能性を増大させた身体的表現の可能性は、他の芸術的表現形態においても追求されている。ここには原始主義の危険が潜んでいるが、だからといって逆に根源的な身体的存在を超越して、洗練された文化形式へと排他的に突き進む必要もない。

以上、自由表現という領域において子供が創造的存在として二通りの様式をとっていることを見てきた。つまり諸形態と戯れ遊ぶ様式（遊び的造形）、そして形態付

与の様式の両者である。子供は成長するにつれて形態付与を上手に行なうようになり、いろいろの不安定な印象に左右されつつ自然的傾向によってコースから逸脱してしまうことが少なくなる。幼稚園児と小学校児童の絵を比較してみよう。幼児の絵には画像の遊び的な繰り返しや変化が見られる。真っすぐな線、揺れる曲線、ぐるぐるとめぐる線、各種の図形などは、画用紙という描画空



間のうごめく、子供の自然リズムの表現なのだ。小学校児童の絵では物の形態がより固定的となる。彼らは知識をもっていることにはなおさら熱心になる。つまり次第に批判になっていくのだ。それによって物の形態には遊び的側面が失われてくる。この点で幼児絵画との区別がつくのだ。しかしながら形態付与における根源的なるものは保持されていくのであって、これが児童画の特徴となっている。

形態付与的な創造性が阻害されてくる小学校児童にとって、具体性が增大するのは彼らの目的意識と相反する事象である。そして次第に模倣へと向かい、手本として他の人の前例を利用しようとする。お手本どおりに男の人や、お家、家のようなキノコを描くのだ。この年齢の子供たちには、一方に成長する自己意識があるにもかかわらず、形態模倣が一定の役割を果たしている。またこの点は、この年齢層の子供達に創造的表現の機会を与えたいと思っている者達にとって、苦勞の種だともいえるのだが。④しかしながら小学生達は自信にあふれた形態模

倣者である。往来でやる伝統的形式の遊びに参加するのと同じ熱心さで、お手本を模写するのだ。

美術教育においても伝統的な理解というものが存在しており、子供は―自然主義的な芸術理念に従って―実際に見えるものを(写真のように)描くように指導されている。しかしこのような伝統的方法は、自由表現における子供の自由を守ろうとする人々との争点になっている。形態付与による子供性の表現が、描画ほど明らかになるところはない。遊ぶことと同様に、子供の形態付与は非常に根源的であるので、大人はそこに芸術的理念をすら追求しようとする。子供の表現の自然性が注目されることと、昔の洗練された形式を忌避する傾向とは好対照をなしているといえよう。「表現的生活の中に身体と生のリズムとの連関が見出される」⑤。

子供の遊びや形態付与に大人は多大な関心を寄せている。子供は形態模倣をするが、また遊び的造形を生む自由をも発見する。子供は創造的な形態付与を可能にする世界から、ある関係的位置を見出すのである。親との同

一化だけでは十分ではない。子供は自ら誰かになろうとするのであって、身体性の発達および身体性からの発達によって自我を形成していく。(つぐく)

原註・参考文献(抄)

- ① M. Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard 1960, p. 64 「遊びと遊び教育学的問題」(フュルメール著)では、本節で扱われている多様な遊び行動は審美的遊びと名付けられている。ここでは遊びと芸術との違いと一致点について考察されているが、芸術領域の扱いは精密さに欠け、無論より専門的な分析を必要としている。したがって人間存在が何か個人的な事柄を表現する表現力を表現形式に与えるには自己省察が有効であるに違いない、という意見ははまだ根拠付けの余地を残している。この段階まで子供はまだ達していないが、形態的に子供性を表現することによって既に傍観者の気持を動かすことはできる。

② P. Moor, *Die Bedeutung des Spiels in der Erzi-*

*ehung*, Bern 1962. 表現的充満と形態付与 (Fülle und Form) について論じられている。

③ R. C. Kwant, *Mens en expressie*, Aula 377, 第

四章 'Utrecht/Antwerpen 1968. 『人間と表現』

④ V. Lowenfeld, *Creative and Mental Growth*, N. Y. 1964.

⑤ 原註③参照。

(お茶の水女子大学大学院)